



水澤絳雪ひとり雑誌

雪下

第二十六号
2022/08/05 発行

題字：高橋弘美

ご挨拶

ようやく梅雨が明けた。と思ったら、とたんに連日最高気温三十三度だの三十五度だのといって人をおどかすのである。まったくたいしたものである。と思っていたら、八月に入ったとたん、風がもう秋なのである。いかに北国といえど、せめてお盆くらいまでは暑い蒸すのといって天気をなじってやれると思っていたのだが、どうもそれもかなわないようである。

夏の終わりを感じると、なぜ無性に寂しくなるのだろうか。たぶん、どこまでも凶暴で元気でぎらついた夏に、なんだかんだと云いながらもわたくしたちはなぐさめられているのだろうか。それはわたくしたちにとって、やはり自然から遣わされるひとつの救いであるだろう。

とはいえ、暑さというものはどうも人をだらけさせ、やる気を失わせてしまう。二百年後くらいのわれわれは、インド人のように飄々として得体の知れないのんきさを持ちあわせるようにならないだろうか。ものごとはみんなのんべんだらりとして、進みそうで進まない。そうなってくれたとしたら、まだ救いがあるように思うのだけれども。

今号の内容

アムリタ

後記に代えて

アムリタ

わたくしは以前、托鉢しながら修行の旅を続けていたとき、偶然知りあいになった女から次のように聞いた。

その女は名をアムリタといい、田舎町に暮らす主婦である。夫は以前には、この町では誰ひとり知らぬ者のない、ひどい大酒飲みの酒乱であった。自分の命よりも酒を愛しているとでもいうように、酒にすべてを注ぎこみ、親のわずかな財産もほとんど酒に替えて失くしてしまっていた。両親は近隣の農家から作物を買いつけ、自分たちでも少し作って売るような、まじめな人たちだということだが、そのひとり息子にはどういふわけだかそうした堅実なところが少しもなく、日の高いうちから酔っぱらっては悪態をつき、母親を殴り倒したり、父親を突き飛ばしてぷいと家を出て行ってしまい、しばらく戻ってこなかったりした。

両親は、結婚でもさせれば息子も少しはまともに

なってくれるのではないかと期待して、アムリタを家にもらってきたのであるが、息子の酒乱は治まるどころかますますひどくなるようであり、かえって逆効果のようであった。だが年数が経つうちに、少しずつではあるがしらふの時間が増えてきて、いくらか働くようにもなり、いまは昔に比べればよほどましになったということである。まだときどき盛大に酒をやってはひどく叫んだりするようなこともあるけれども、暴力沙汰に発展するようなことはなくなりまねになったということだ。

アムリタはこの酒浸りの男とのあいだに四人の子どもをもうけた。いずれも健康に育ったが、最後に産んだ末の息子は、病弱で気難しい子どもだった。アムリタはおだてたりなだめすかしたりしながら、甘くした粥に体によい葉草を混ぜて与えるなどしてうまく育てた。その子どもは頭がよかったので、いまは家を出て勉学に励んでいるという。

アムリタはざつとこのような家庭に身を置く主婦であって、特に学があるというわけでも、なにか人目を惹くような才があるというわけでもないが、町の人のあいだでは信頼されている。人々は明るく親切で屈託のない彼女と話をすることを好み、子どもたちは彼女を友だちのように思って、よく遊びにやってくる。家はきれいに掃除されて風通しがよく、必要以上のものはなにもないが、貧しい感じは少しもない。アムリタは、偶然托鉢に訪れたわたくしを

その家の中に招き入れ、手ずから作った料理を差しだしながら、この話をして聞かせたのである。

そのころ、アムリタはまだ十二歳の少女であった。父は商人で、家は決して裕福ではなかったが、誠実で働きの父親と、おおらかで明るい母親を持ち、弟と妹がいて、アムリタはまこと無邪気にすくすくと育った。

だがこのころ、アムリタの父にさる不幸な出来事が降りかかり、そのせいで明るく賑やかだった家はすっかり変わってしまった。その不幸というのはこういうことである。

アムリタの父は、町の有力者の息子と幼なじみで、互いに固い友情で結ばれていた。アムリタの父はまじめな、もの堅い男で、一方の幼なじみは少々むらつきで気が多く、あれこれと目移りするままにさまざまなことをやっては、いつも途中でうまくいかなくなって、頭をかき苦笑いを浮かべながらアムリタの父のところへやってきて、あれはだめだったよ、と云うのであった。そうするとアムリタの父は、だからよせと云ったじゃないか、しようのないやつだと云って幼なじみを小突いた。そうしてふたりで笑い、酒を飲んだり戯れに骰子を転がしたりして、夜が更けてくると、幼なじみは自分の家へ帰って行ったのである。

ところでこの骰子というやつが、幼なじみの弱点

であった。若い時分から、幼なじみは定期的にこれをやらないでは気がすまなかったが、彼らの暮らす片田舎の町では、骰子といってもちよつとした賭けのまねごとのようなものであって、幼なじみも結構それで満足していたのである。

ところが、この話のしばらく前、この幼なじみは諸用で遠方の都へ旅した。そしてついにまことの賭けというものに出くわしたのである。しばらくして町へ帰ってきたとき、幼なじみはそのしびれるような独特の緊張感や、骰子を振って目が出るのを待つ一瞬のなんともいえない、身のすくむような、恐怖にも似た興奮のことなどをアムリタの父に熱く語ったが、アムリタの父がそんなものあまり入れあげてはいけなさと云うと、急にひどく真剣な顔になってうなずき、こう云った。

「もちろん、わかっているよ。あれはなんといつても都会の道楽だ……おれのような田舎者には、しょせん、ほんとは縁のない楽しみさ」

この話はこれでおしまいになったのだが、どうしておしまいどころでないことがこのころ判明したのである。幼なじみは都から帰ってからというもの、あの興奮や緊張をどうしてももう一度味わいたい、どうしてももう一度あの雰囲気の中で、あの手練れの連中に混じって勝負がしてみたい、という思いにすっかりとり憑かれてしまい、昼も夜も悩まされていた。もちろん、そんなことはやめたほうがいいの

は百も承知していたのであって、そのため彼はずいぶん苦しんだのである。

だが結局、彼はその気持ちを抑えることができなかった。用があると偽ってふたたび都へのぼった彼は、さつそく骰子を振りに駆けつけ、念願を果たした。このとき彼はかなり勝った。そしてもうやめられなくなってしまうのである。

何日か通いつめるうちに、最初あれほどたやすく手に入った金はすっかりなくなっていた。彼は消沈し、そろそろ家に帰らなければならぬことを思っています。ますます気持ちが暗くなった。そんなとき、賭博場の経営者らしい立派な風采の男に声をかけられた。気さくな男で、ちよつとしたしぐさや言葉の端々に、気の利いたさりげない思いやりが感じられ、彼はつい苦しい事情を打ち明けてしまった。するとその男はにっこり笑ってこう云ったのである。

「なあに、そんなことなら心配はいらない。あなたの町の近くにわたしの知り合いが住んでいます。ことまったく同じように楽しめますよ。なんです、金なんてまた勝って作ればいい。簡単なことじゃありませんか。ここ何日か、わたしはずっとあなたのことを見ていたが、あなたはなかなか筋がいいようだ。きつとまた勝てますよ。毎日来てくれたお礼にこれを差しあげますから、これで試しにやってもらいなさい。わたしはこの骰子でここまで来たんだ……」

男はそう云って、なにやら謎めいた笑みを浮かべ、彼の手に使いこまれた骰子を握らせた。その骰子は牛の角で作られた、非常に古いものらしく、茶色く変色し、長年手垢で磨かれてきたことを示すようにつやつやと光っていた。その中には、何度も勝負に勝ちぬいてきた男の気運や魂がこめられている気がし、幼なじみはひどく感動してしまって、男に幾重にも感謝し、自分の町へ戻った。

ようし、おれはこんな田舎で腐っているような男ではないぞ、これまでだってそう思っていたんだが、どうも運というやつが向かなかつたんだ。が、この骰子を手に入れたからには、大丈夫今度こそ万事上向いてくるに違いない。妻子にだつてもっと贅沢をさせてやれようし、あの幼な友だちにもいろいろしてやれる……：：：：：だいたいあいつは昔から、欲つてものがなくていけない。ただ真面目に働くばかりで、そのくせ少しもいい目を見ていないからなあ！

こうして彼は急速に傾いていったのであるが、かなり長いあいだ、それを人に知られずに隠しておしていた。家財やなにかを持ちだして元手にするときにも、うまく云いつくろつて家の者に信じさせていたし、本人でさえも、必ず取りかえせると信じていたのである。彼の手には、あの必勝の強運を宿した骰子があった。あの賭博場の経営者が、自分に目をかけて特別にくれたのである。負けるはずがなかった。一時的に負けたにしても、それは輝かしい勝利

の前のお膳立てに過ぎないのである。

幼なじみはのめりこんだ。なかなか手の届かぬ勝利めがけて、それが遠のけば遠のくほどにのめりこんだ。そしてある日、ついに首が回らなくなり、彼の高志もむなしく潰えた。

彼には財産というものがもう少しも残っていないかった。自分の家財のみならず妻や子までも担保にして借り、きょうだいや親戚のものにまで手をつけていた。家族に問いつめられ、彼はとっさに、これはあの幼な友だちが自分に勧めたのだと云いわけをした。あの男は昔から陰でこっそり博打をやっていたのであるが、それをおれにも勧めたのだ。おれはいやだと云ったのだが、あの男が金は貸してやるからまあいっぺんやってみろとしつこく云うので、ついそうしてしまった、そして抜け出せなくなってしまったのだ。なにしろああい場所にいる手合いというものは、いざとなれば暴力や脅しでもって人を云いなりにさせるのだから、どうしようもなかったのだ。あいつは品行方正な男で通っているけれど、とんでもない、嘘だと思ふならあいつの財産がどうなっているか調べてみるがいい、みんな借金の形にとられてるから……。

りたいのだろうと半ば無理に信じこんでいた。幼なじみがうまくとり繕っていたためもあって、まさか自分の財産がみんな使いこまれていたとは、さすがに思わなかったのである。

アムリタの家へ、幼なじみのきょうだいや親戚連中が血相を変えてやってきた。話を聞きつけた近所の男たちも何人か一緒に来ていた。彼らはどやどやと家上がりこんできて、アムリタの父をののしり、突き飛ばし、なんのことかわからず目を白黒させている男をとりかこんで、殴ったり蹴ったりしはじめた。止めに入ったアムリタの母を突き飛ばして、家中のものを打ちこわし、気のすむまで暴れてから、彼らは出ていった。こうしてアムリタの父は、ひと晩で財産と町の人たちからの信頼とをいっぺんに失った。

アムリタの生活は一変してしまつた。これまでにこやかに声をかけ、挨拶してくれていた人たちが、わざと無視したり、いい加減な返事しかしてくれないようになった。昨日まで一緒に遊んでいた子どもたちも、戸惑つたような顔をしながらアムリタを避けるようになり、一部の子どもたちは、このときを待ちわびていたかのように熱心にアムリタや弟、妹をいじめだした。アムリタはもともと物怖じしない、気丈で男勝りなところのある性格で、いじめっ子には飛びかかり、不正があるとかんかんに怒つて相手をやっつけにかかるような子どもだったから、とつ

ちめられていまますます思つていた腕白どもも多かったのである。

家の中も惨憺たるありさまだった。二、三置いていた使用人はいなくなり、打ちこわされて散らかつた家の中はいつまでも片づかないままだった。そのすさんだ家の中で、父は暗い顔をしてむつとりと黙りこみ、自分のそばを通り過ぎる人間を誰彼かまわずじろりとらみつけた。その顔はこう云っているようだった。

「おれはもう金輪際誰も信用しないぞ。誰も信頼できない……妻がなんだ、子がなんだ、父が母がなんだ……みんな敵だ、どうせ裏切られる……」

母の変わりようもひどいものだった。台所の隅に座つて、割れた皿や打ちこわされた水桶などを沈んだ顔でうち眺め、おもむろによろよると立ち上がつてそれらを片づけはじめのだが、しばらくするとみんな壁に投げつけて、また座りこんで泣き出した。母はこういうわけか、自分が間もなく家を追い出され、借金の形に売り飛ばされるに違いないと信じこんでいて、その不安と緊張が頂点に達すると、ほんとうなのか作り話なのかわからないような話をして父をなじつた。だいたいあなたは人がよすぎる、わたしはあの人、昔からどうも虫が好かなくなつた。どこかだらしがなくて、いい加減で……いま思えば、きつといつかこんなことになるわかつてたのね。あの人はいつだかわたしの腕輪を盗んだ、

あのときは気がつかなかったけど、絶対にあの人がやつたに違いない。わたしはそれを知っていたし、あなたも知っていて当然だったのに、あの人はあなたの親友で、あなたはすっかりあの人を信じていたから、わたしだって……。

父はずいぶん長いあいだ、母の妄言のような愚痴のようなものにだまって耐えているのだが、そのうちふいに立ち上がって、もう黙れというように母を突き飛ばし、外へ出て行くのである。突き飛ばされた勢いで母は倒れ、わっと泣き出し、アムリタの弟も妹も泣き出して、アムリタは思わず外へ駆けだして、走って走ってしゃがみこみ、ぎゅつと目をつむって耳をふさいでいた。

この日アムリタは、いじめっ子たちに突き倒されて泥だらけになり、泣きながら帰ってきた弟の体と服とを洗ってやり、両親の異様な様子にすっかりおびえて口を利かなくなってしまう妹に、わずかに残っていた米をお粥にして食べさせてやった。アムリタはなんだかひどくくたびれていた。じつとしていると泣き出してしまいそうだったが、泣いたらとりかえしのつかないことになりそうで、泣くのがこわかった。そこで自分を奮い立たせるために、泣いて帰ってきた弟のことを思い出し、弟をいじめたやつをやっつけてやろうと思って、こわい顔をして家を出た。母の繰り返しがまたはじまりそうだった。

アムリタの住む町の裏手には、広々とした林が広がっていた。この林は、代々あの父の幼なじみの家が所有してきたもので、町の人たちにも開放されており、人々は木陰で涼んだり、気分転換にぶらぶら散策したりするのを日課にしていた。これはアムリタが生まれる前のことであるが、信仰心の篤い先代の当主が、ときどきこのあたりにやってくるさる聖者にこの林を寄進すると発表した。町の人たちはどうなることかと思ったが、その聖者はひとところにいられないたちの人らしく、このあたりへはときどきやってくる程度で、しかも林のうんと奥のほうに滞在するということだったので、人々は以前と同じように出入りしてよいと認められ、大いに安堵したということがあった。

木々のあいだを縫ってしばらく行くと、林の中を流れる川にたどり着く。このあたりまでは、町の人たちもよく涼みにやってくる。この川に沿って川上のほうへずっと歩いてゆくと、しだいに勾配が上がってゆき、木々も鬱蒼としてくる。その先は深い森で、町の人たちもめつたに来ることがないが、アムリタはときどきひとりでこの森の入り口のあたりまで来て、川のほとりに腰を下ろし、水面をじつと見つめて時間を過ごした。とくに孤独を求める性格だというのではなかったが、さんざん近所の子どもたちと遊びまわったあとで、ひとりそっと森に分け入って、静かな川辺に座って過ごすのは、なにかとて

も贅沢なことをしているという気がして、気分がよかった。そんなふうにはひとりきりでいるときには、耳に入ってくる木の葉のふれ合う音も、鳥の声も、目に映る川の流れもみんな自分だけのものだという気がしたのである。

いじめっ子をやっつけてやろうと思って家を出たはずなのに、アムリタの足はなぜか町の中へは向かわず、それとは反対にこの林の奥のほうへ引き寄せられるように歩いてきてしまった。仕方がないので、アムリタはいつものように川岸に腰を下ろしてあたりを眺めた。川はいつもと変わりなく涼しげな音を立てて流れ、花をつけた木々を水面に写しとり、日の光を浴びてきらきらと光った。その光のひと粒ひと粒が、揺れながらアムリタに微笑み、アムリタに目配せし、アムリタをなにか愉快的な遊びに誘っているようにも見えた。

あんたたちは気楽でいいわ、とアムリタは思った。そうやって水の上で跳んだり跳ねたりしてればいいんだもの。わたしはいま、それどころじゃないの。なんだか悲しくて、泣きたくて、腹が立って、どうしたらいいかわからない。きつとこんなこと思っているの、世界じゅうでわたしだけに違いない。わたしって、なんてひとりぼっちなんだろう。わたしのことなんて、きつとみんなどうでもいいんだし、誰もわたしのことなんかわかってくれない……それにしても、町の人たち、みんななんていやな人たちだろ

う。このあいだまであんなに親切にしてくれていたくせに、いまじゃ口も利いてくれないなんて。友だちだと思っていた子もわたしを避けてる。他人ってそんなものかしら。これまでのこと、みんなほんとじゃなかったのかしら。そうだとしたら、ほんとのものなんてなんにもないんじゃないかしら……。

アムリタはひどくむなしく、やるせない気持ちで、背中を丸め、立てた膝に顎を乗せた。川面の光はアムリタをなぐさめようと、きらきらと輝きを増したように見えた。アムリタはしばらくじっとそのきらめきを見つめていたが、確かに少しはなぐさめられたような気がした。

目を閉じて耳をすますと、木々をざわめかせながら優しく吹きわたる風や、その風に乗って響いてくる鳥の音が聞こえ、かすかに香ってくる花の甘い香りなども感じる事ができた。森のものたちは、みんなアムリタに同情しているようだった。落ちこんだアムリタをなぐさめようとして、水面のきらめきは跳ね回り、風はアムリタの頬を撫でさすって、鳥はアムリタの胸にふたたびよろこびを吹きこもうと鳴くのだった。それは確かにアムリタをなぐさめ、アムリタの心に染みこんだ。だがそれだけにいつそう耐えがたく深い孤独が、アムリタの胸に湧き上がってくるのだった。アムリタはそうしたなぐさめを、もう二度とふたたび人間からは受けとれないような気がしていた。この先ずっとこんな気持ちを抱えて

いなければならぬのかと思うと、アムリタは叫びだしたいほどの悲しみに襲われた。

どれほどのあいだそうしていたのか、アムリタはふと、なにか動くものの気配を感じて目を開けた。首をひねってあたりを見まわすと、少し離れた川岸に、ひとりの男があぐらをかいて座りこんでいた。男は背が高く、ひどく痩せていた。顔じゅうしわだらけで、髪はすっかり剃りあげてあり、肌という肌はみな日差しにあぶられ赤銅色に焼けて光っていた。右肩をあらわにして薄茶色の汚れた布をまとい、足は裸足でサンダルも履いていなかった。歳はいくつなのか想像もつかなかったが、子どものアムリタにはたいへんな年寄りに見えた。

その年寄りは微笑んで、どこか遠慮がちにアムリタを見つめた。穏やかなまなざしには、悪意やいやな感じは少しも含まれておらず、なにかなつかしいものを見るように、その老人はアムリタを見つめていた。アムリタは不思議に思いながら、その年寄りに軽く会釈した。きつとときどきこの林にやってくるという聖者であるに違いない。聖者というのがあるにをする人なのか、アムリタはよくわからなかったが、なにか普通と違って尊いことをしている人たちであり、多くのことを知っていて、その人たちに出会い、もてなすことは、自分の幸福を呼ぶことだと母親が云っていたのを聞いたことがあった。

その聖者は、アムリタの会釈を受けて笑みを深め、

少し身じろいで姿勢を正すと、前を向いて目を閉じてしまった。眠っているのかと思ったが、そうではなさそうで、なにか深い考えごとに沈んでいるようだった。

アムリタは一瞬、聖者の邪魔をしないように立ち去るべきかとも思ったが、自分だけの場所と思っていたところに別の人が堂々と座っているのがなんだかくやしいうような気がし、立ち去ったら負けのような気もして、そのままここにすることにした。

水面の上で、相変わらず無数の光のきらめきが揺れ踊っていた。アムリタ、アムリタ、アムリタ、と光は呼んでいるように見えた。あの光たちと遊ぶには、どうしたらいいのだろうとアムリタは思った。あの光の呼びかけに答え、あの光のようになって楽しく踊るには、どうしたらいいのだろう。ついこのあいだまでわたしもあんなふうだった気がするのになんだかずと昔のことみたい。楽しくみんなと駆けっこしたり木登りしたりしていたアムリタはどこへ行ったのかしら。わたしと遊んでくれていたみんなはどこへ行ったんだろう。みんな確かにそこにいるのに、ぜんぜん別の人みたいなんだもの。お父さんもお母さんも、いまじゃすぐく別の人だし、弟も妹も、みんな違う人みたい……前のみんなはどこへ行ったんだろう……こんなこと、誰に訊けば答えてくれるのかしら。もしかしたらあの聖者さまは、こういうこと知ってるのかしら……。

こう思つてふと聖者を見ると、彼は目を開けていて、なんとなくまぶしそうに川面を見つめていた。

アムリタが見ていると、気がついたのかこちらへ顔を向け、小さく微笑んだ。聖者の顔は象のようにならわで、口もとや額には赤銅色の皮膚をたくしこむように深いしわが刻まれ、それが表情全体に不思議なあたたかさとしみみを添えていた。目は黒く、しわくちやの皮膚に囲まれた深い眼窩の奥で、ふたつの暗い星のように光っている。その目の輝きは、なぜかアムリタのよく知っているもののように見えた。好奇心にきらきらと光り、世界にあふれる無数の楽しさに輝き、曇りもなく陰もたない、そんな無邪気な子どもたちの目、アムリタもついこのあいだまで確かにしていたような目、聖者の目の輝きはちょうどそのようであり、だが同時に、子どもたちにはない深みのようなものをたたえてもいた。それがなんなのかわからなかったが、アムリタはその深みのようなものに惹かれた。そしてこの老聖者に対して、むくむくと好奇心が湧いてくるのを感じた。

「あの、聖者さま」

アムリタは思いきつて聖者に声をかけた。

「聖者さまはここでなにをしているんですか？ さつきはどうして目を閉じて、じっと座っていたのですか？」

聖者の笑みが深まった。口もとの二本のしわはますます濃くなり、黒い目はまぶたと下まぶたの皮膚

のあいだに、ほとんど埋もれそうになった。

「おそらくそなたと同じように」

聖者は口を開いた。少ししゃがれたような、しかし深みのある力強い声だった。

「わたくしはわたくしの頬や肩をなでる風を感じていたのだ。水面にきらめく光の遊ぶのを見ていたのだ。わたくしはそれを見たので、目を閉じた。その風や光のもとへ遊びに行くために、風や光がわたくしに差しだすものを受けとるために」

「あの光と遊べるんですか？ わたし、ああやってきらきらしている光が、一緒に遊ぼうって云っているように見えるんです。わたしもそうしたいけど、でも、どうしたらいいのかわからないんです。目を閉じればいいんですか？」

アムリタは川面に向きなおり、しっかりと目をみつめてみた。

「そのまま少し目を閉じていなさい……目の裏に、いま見た光が浮かんでこないだろうか……」

聖者がアムリタを助けるように云った。

「うーん、まだ真つ暗……あ、待って！ 見えた！ きらきら光ってる……」

「それをじっと見つめていなさい……挨拶をしてもいい……そのうちに、彼らの声が聞こえてくる……」

「聞こえてくるんですか？ ……うーん、わかんないな……練習が必要みたい」

アムリタはあきらめて目を開けた。

「目を閉じてものを見るには、確かに少し練習が必要だが、きつとすぐにはできるようになる。目を閉じた世界では、目を開けている世界で見るとは別のものが見えるのだ。目を開けているあいだは近づけないものと親しくなることもできる。川面の光や、風や、星と親しくなるには、目を閉じるほうがいいのだ」

「そっか……そんなこと、考えたこともなかった」
アムリタは面白がって、しばらく目を閉じたり開けたりした。

「娘よ」

アムリタが十分に楽しむのを待って、聖者が話しかけてきた。

「わたくしがひとつそなたに教えたから、そなたもひとつわたくしに教えてほしい。先ほどは、どうしてひどく沈んだ顔をして、悲しげにそこに座っていたのか。なにか悩んでいること、苦しんでいることがあるのか」

聖者はそう云って体の向きを変え、アムリタに向き合った。そうすると、その老聖者は思った以上に大きい人に見えた。胴や腕はほっそりしているが、肩幅は広く、手足は平べったくて大きく、その大きさが目に飛びこんでくるのだった。大きく枝葉を広げ、乾期には涼やかな木陰を作り、雨期には雨宿りの場を提供してくれる、その下にたくさんの人や生き物を抱えこんできた木のように、その人は大きく

たのもしげに見えた。

「アムリタはしかし、聖者の質問に答えるのをだいぶ長いことためらった。なんとなく人に云うのが恥ずかしいことのような気がしたし、こんなことをわかつてもらえるかどうか自信がなかった。だが聖者は辛抱強く待っていた。その優しい沈黙に誘われて、アムリタはやがてぼつぼつと話しだした。

「わたしのお父さんのことなのです」

「アムリタは唇を噛み、しばらく考えてから、父に起こったことを説明した。

「それで、すっかりなにもかも変わってしまったんです。なにが変わったのか、わたしにはわかりません。でもとても変わってしまったんです。前はあんなに仲がよかったのに、お母さんはお父さんに文句を云ってばかりいます。お父さんはとても優しい人だったのに、いまではみんなを嫌っています。わたしの友だちはわたしを避けています。わたしも変わってしまったみたいです。もう前みたいに楽しくいられないし、だまっていると泣きそうになるんです。それで、最近ずっと考えてるんです……どうやってら前のわたしに戻れるんだろう、どうやってたら前のようなみんなに戻るんだろうって。聖者さまはその方法を知りませんか？」

「聖者はしばらくのあいだ、表情の読みとれない目でアムリタを見つめていた。それから深く息を吐き、こう云った。

「娘よ、なにかがもとに戻るといえるのは、この世界ではとても難しいことなのだ。ほとんど不可能といっているくらいである」

「そんな……じゃあ、ずっとこのままなんですか？ そんなのいやです」

「アムリタは思わず拳を握りしめて叫んだ。

「そうではない、娘よ。この世界では、なにかがもとに戻るといえることも難しいが、なにかがずっとそのままであることも難しいのだ。そうではなくて、すべてのものは、絶えず変わってしまっているのだ。そなたのその苦しきも、いづれ変わってゆき、いまとはまた別のものになるだろう。そなたのお父さんやお母さん、弟や妹も、いづれまた変わって、いまとはまた別の人のようになるだろう。それはさだめであって、誰にも、どうしようもないことなのだ。流れてゆく時間を止めることができないように、川の流れを逆さまにすることができないように、移り変わってゆくものをとどめたり押しもどしたりということは、わたくしたちには決してできないのだ」

「でも、そんなのあんまりです。わたしはただ、いまままでみたいのに、みんなで仲良くいたいだけです。それはできないことなの？」

「アムリタは泣きそうな顔で聖者を見つめた。まるでそこにすがるべき最後の希望が書かれてあるとでもいうように。

「……わたくしも、昔そのように思ったのだ」

長い沈黙のあと、聖者はふとそうつぶやいて、川面へ視線を投げ、それを超えて遠くを見つめるような目をした。

「そして、その方法を見つけるために旅に出た。長い長い旅に。わたくしは生涯をかけてそれを見つけてみせようと思った。苦しみをぬぐい去り、悲しみを打ち消す方法を求めて、わたくしは旅した」

「聖者の黒い目の奥に、一瞬、アムリタの知らない感情のような、記憶の名残のようなものが揺らいだ。

「長い長いあいだ、わたくしはあてもなくさまよった。間違った道へ何度も迷いこみ、幾度も道を失って迷子になり、それでもわたくしは旅を続けた」

「聖者はどこかはるかな場所を見つめていた。長かった彼の旅路か、その途中に起きた出来事か、いづれにしても、アムリタの思いも及ばないようなものを、聖者は見つめているようだった。

「……それで、答えを見つけたのですか？」

「アムリタは我知らずおののきに似たものを感じつつ、おずおずと訊ねた。聖者はアムリタへ視線を移した。そうしてはつきりとうなずいた。

「わたくしは確かにひとつの答えを見つけた。もっとも、それはわたくしの思っていたものとはまるで違っていたのだが」

「アムリタは首をかしげた。聖者はそれを見て、話の重苦しい雰囲気打ち消すように微笑んだ。

「だがわたくしの見つけた答えをいま云うのはよそ

う。わたくしがいまのそなたに云えるのは次のようなことだけである……娘よ、人はその生涯の中で、そなたがいま感じているような悲しみや苦しみを、たびたび感じねばならない。悲しく、苦しく、つらいことが起こるのは人のさだめであり、どうあってもそれは起こる。わたくしたちは本能的に、変わることをおそれ、変化を嫌うが、そのくせこの世界ではすべてのものが移り変わってゆく。花は芽吹き咲いて枯れ、人は生まれ老いて死ぬ。季節は移り、わたくしたちの心も移る……そなたの周りの人たちが心変わりしたように、そなたのお父さんやお母さんが変わってしまったように、そしてそなた自身が変わってしまったように、わたくしたちの心は変わる。

一瞬もとどまることなく。空模様が変わり、昼は夜になり、乾期のあとには雨期が、雨期のあとには乾期がやってきて、太陽も月も星も少しづつ座を変えてゆく。わたくしたちは、決して昨日までと同じような自分ではいられない。いつまでも楽しく愉快な子どもではいられない……これは耐えがたい苦しみである。しかもこの先、その苦しみは何度も襲ってくるのだ。そのたびに、そなたは悲しみ、苦しき泣き叫ぶであろう。わたくしはうそを云うことはできない。ごまかしを云うことはできない。そなたは確かにこれからも何度も泣き、何度も苦しむ。そしていつも思うであろう。昔の自分に戻りたい、楽しかったころの自分に還りたい、と。だがそれもむな

しい願いなのだ。そなたは先へ進むしかなく、後戻りすることは決してできない。そうしていつの間にかこのわたくしのような老いぼれになり、やがて死を迎える」

聖者は静かにアムリタを見つめた。そのまなざしの中に、そのしわだらけの顔の中に、枯れ枝のように細い手足の、肉がそげ落ちあちこちの骨がむき出しになった体の中に、彼の云う苦しみや老いや死というものが確かにいて、アムリタを見つめているように感じられた。アムリタはこわくなった。そんなものをまともに見たことがなかったからである。聖者の老いぼれた姿の中に、ほとんど絶望的な自分の未来があった。つらく、苦しく、実りのない、最後は一本の枯れ枝のようになって終わってしまう、絶望的な未来が。

「そんなのいや！ それだったらわたし、いますぐ死んじゃったほうがましです」

アムリタは恐怖に駆られ、そう叫んで、わっと泣き出した。そんなのいや、いや、いやと首を振り、泣きじゃくった。聖者は泣き叫ぶアムリタを静かに見下ろしていた。なでてなぐさめてくれるわけでも、優しい言葉をかけてくれるわけでもなかった。ただじつとアムリタを見つめて、落ちつくのを待っているようだった。

「人はいつも問いかける。どうして、と。どうして自分がこんな目に遭うのか、どうして自分の人生は

こうなのか、と。だがそのような問いかけには答えがない。そこに理由などない。たださまざまな条件が重なって、そのような事態を引き起こしただけなのだ。そなたのお父さんと幼なじみが、たまたま同じ町に生まれ、たまたま心が通じあつて友だちになり、お父さんの性格や幼なじみの性格や、さまざまなものが作用してそなたのお父さんに起きたようなことが起こったが、それだけのことなのだ。そこに悪者はいない。犠牲者もまたいない。ただそのように見えるだけである。こんなことを云うと、人は身も蓋もないと嘆き、あるいは怒るが、しかしそうなのだ……ここにもまた、ひとつの大きな苦しみがある。わたくしたちは理由を求め、原因を求め、糾弾すべきものを求める。わたくしたちはすべてのものごとの背後に、いつも非常に人間らしいものを求める……だがそんなものはないのだ」

泣きじゃくるアムリタを見下ろしたまま、聖者は云った。

「だからわたくしたちは苦しむ。わたくしたちは人間であるが、わたくしたちの住む世界は人間ではない。それはわたくしたちの都合のいいようにはできていない。それはただ絶えず移り変わり流れてゆく。川のように。それはただ絶えず動き、刻一刻様子を替える。空のように。わたくしたちはなにか永遠に続くものを求める。自分のいまが、生命が永遠であることを願う。だがそれははかない望みであり、わ

たくしたちの住む世界はそのようなものを与えてはくれない。わたくしたちはみな孤独に、苦しみに満ちた短い生涯を終える。絶えずこう思いながら。永遠はどこにあるか、意味はどこにあるか、不滅のものはどこにあるか。この山を越えたら、海を越えたら、無限の安らぎは見出せるだろうか」

アムリタは涙を流し、しゃくりあげながら聖者のこうした言葉を聞いていた。その意味はアムリタにはほとんどわからなかった。彼がなにを云い、なにを語っているのか、アムリタには少しもわからなかった。だがそれは不思議と、わかるとかわからないとかを超えて、アムリタの心に静かに、深く入りこんだ。そしてその言葉の染みわたる場所では、アムリタはそれらの言葉の意味を確かに知っているような気もした。自分には少しもわからなくても、自分の心はこれらの言葉を知っていて、乾いた大地に雨が染みこむように、その場所へこれらの言葉を染みこませているような気もした。

「わたくしもまたかつては、こうしたことを考え、安らぎを求め、苦しみに満ちた願いを胸いっぱい抱えていた。たとえわたくしの母は、わたくしが生まれてすぐに死んでしまった。それはたとえようもないほど寂しく、泣き叫びたいほどに悲しいことであつた、わたくしに母がいらないことは……わたくしは母のいる多くの子どもたちをうらやましく思った。ねたましく思い、どうして自分にだけ母

がいないのかとうらみがましい気持ちでいっぱいだった。わたくしはとりわけ寂しがり屋で、甘えん坊で、怖がりで、そんなわたくしに限って甘えさせてくれる母がいらないのだ……」

アムリタはびっくりして顔を上げた。あんまり驚いたので、涙も止まってしまった。彼女はまじまじと、目の前の年老いた聖者を見つめた。こんなおじいさんが、お母さんがいなくて寂しくて悲しいと云うのは、なんだか変なことのような気がした。それにアムリタが聞いた話によれば、聖者というのは普通の人とは違い、この世界のことには関心がなく、普通の人とは別の、ほとんど神々の世界に生きているような人だということだった。だからそうした聖者たちを拜むのは、神々を拜むのと同じようなことであり、そうするのはよいことなのだということである。

ところが目の前の聖者はいま、神々どころではなく、死んでしまったお母さんの話をしているのだ。それがとても悲しいことだと云っているのだ。確かにそれは、とてもつらくて悲しいことに違いない！お母さんがいないなんて、考えただけでも涙が出そうなもの！

アムリタはこの聖者を、急に自分にとっても近いもののように感じた。アムリタはいま心から、この母を失った聖者に同情していた。彼女は聖者をなぐさめようと、思わず膝を進めて彼のほうへ這い

寄っていった。そうして聖者の真横に座り、気持ちこめて聖者を見つめた。なにか云おうと思つたが、どう云つたらいいかわからなかった。それでじつと黙っていた。聖者も黙っていた。ふたりはしばらく黙つて見つめあい、川面を渡る風に吹かれた。

「わたし、聖者さまつてながあつても痛くもかゆくもないような人だと思つてた」

しばらくして、アムリタは打ち明けるように云つた。

「でも、そうじゃないのね」

「ながあつても痛くもかゆくもないような人などいはしない。もしかしたら、ほんものの聖者というのはそういう人たちであるのかもしれないが、わたくしは自分が聖者であると思つたことはない。わたくしはただ、たくさんの苦しみや悲しみを抱えて旅をし、ある日旅から帰ってきてみたら、聖者だということになつていたので……これはたいへん不思議なことだが、そう信じている人たちにそうでないと云いまわるのもかわいそうな気がして、そのままにしているのだ」

聖者はちよつとおどけたように云つた。アムリタはなんだかおかしくて、少し笑つてしまった。「聖者さまが旅で見つけた答え、聞かせてくれませんか？ わたしきつとわかんないと思うけど、いつかわかる日が来るかもしれない。だって、わたしも変わっていくんでしょ？ それなら、聞いておいて

損はないわけだもの。よく云うでしょう、年寄りの話は聞いておきなさい、って」

聖者は笑った。声を立てはしなかったが、とても愉快そうに、満足そうに笑っていた。それを見て、アムリタもまた久しぶりに愉快な気持ちになった。誰かと心を通じたあつたときのくすぐったいような心地よさを、アムリタは久方ぶりに感じていた。

「わたくしの旅は長いあいだ続いた……」

聖者は例の少ししわがれた、深みのある声で話しはじめた。

「答えがわかるかと思ひ、断食をしたり、体を逆さにしたり、いろいろなことをして自分を苦しめたりもした。不思議なもので、人というのは苦しい思いをすると、自分がなにか実りあることをしていると気がなつて、充実している気になるのだ。あとからそのことに気がついて、わたくしはこう思った……人間というのは、どうも苦勞が好きな生き物のようだ。そのくせ、苦しいことはいやだと云い、つらいことには我慢ならないとも云う。自分で自分をさんざっぱらいじめたあとで、人にいじめられるのは我慢ならないと云つたりする。おかしいものではないか？ 自分のやることはみんな見過ごして、人のやることにはいちいち目くじらを立てたり、あるいはその逆のことをしてみたりする。いったいこの自分だとか人だとかいうものはなんだろう？ そもそも苦しいとかいやだとか云っているのはこのわた

くのだが、このわたくしというものはいったいなんだろう？

そしてある日、わたくしはふと気がついたのだ……こう思つたのだ。わたくしというものはさまざまな条件の結果に過ぎず、同時に条件のひとつに過ぎない。そして人もまたさまざまな条件の結果に過ぎず、条件のひとつに過ぎないのだ、と。そしてそうした条件の背後には、どんな感情的な働きもなく、意志の働きもないのだ、と。それらはただ、この世界の法則に従つてあらわれ、同じ法則に従つて消え去る。それは絶えず生まれ、絶えず成長し、絶えず死んでゆく。わたくしはその中の点、わたくしはその中の小さなひとつの星。夜空に無数に光る星のように、多くのものの中のひとつであり、ある一定の時間輝き、やがて流れて消えゆく。この星は永遠を夢見る。自分のはかない命が永遠に輝けばと願う。この世界にいつまでもとどまることを願ひ、自分の存在の意味を求めている。

だがそれこそが錯誤である。わたくしの生きるこの世界をよく見よ。季節や星座の移ろいを見、すべてのものの生じては滅するさまを見よ。わたくしはそれらのものの一部である。わたくしもまたそれらのものと同じ法則に従つて生じては滅する。わたくしはひと粒の星、たまさかに生命を宿した星。時期が来れば燃えて消え去る。そうであるならば、法則に逆らうのをやめよ。流れ消えてゆくままに流れ消

え去れ。わたくしが永遠であることは、このわたくしの中にあるのではない。わたくしが永遠であることは、この世界の中で、すでに達成されているのである……」

時間は午後をだいぶ過ぎ、日差しはすでに傾きつつあつた。川面の光はしだいに赤みを帯び、聖者の云うことを支持するかのよように、ぱつと光つては消え、光つては消えしてきらめいた。

「わたくしはこのように理解した。それはわたくしの心を少しわびしく、少し静かに、少し明るくした。わたくしはそれでよいと思つた。そうして、それを胸に秘めて旅を終えた。そうして戻つてみると、わたくしは聖者ということになつていた……」

聖者はいたずらっぽく微笑んだ。

「聖者というのがほんとうはどういう人のことを指すのか、わたくしにはわからない。だがきつとそれもまた、無数の条件のうちの一つについた名であろう。わたくしはこのよように生まれつき、このよように生きた。それは商人や、農夫や、王さまや戦士などと同じよように、ひとつの状態についた名であるだろう。人はみな、そのような意味でなんらかの名をもっている。そしてそのよように生きるのだ。王さまのよように、農夫のよように、商人のよように、戦士のよように、あるいは聖者のよように」

「じゃあわたしは……アムリタはどうやって生きたらいいの？ アムリタはアムリタで、商人でも農夫

でも王さまでもないわ」

「アマリタは聖者を見上げ、ぽつりとつぶやいた。「そなたの名はアマリタというのか」

聖者はその名前をひどく優しく唇に乗せ、それからその響きを味わうようにしばらくのあいだ目を閉じていた。

「よい名である。アマリタよ、それはたいへんよい名である。そなたのお父さんとお母さんは、まことそなたにぴったりの、美しい名をつけた。その名のようであれ、アマリタよ。人々に、そして自分自身にも、不死とよろこびをもたらす甘露のようであれ。

そなたはすでにその方法を知っている。いまはまだその知恵は半ば眠っているが、きつといずれ、それをほんとうに知る日が来るだろう。苦しみに洗われ、悲しみに磨かれて、この体を超えて、この心を超えて、そなた自身も不滅のものとなれ、アマリタよ」

そして聖者はアマリタを祝福した。暮れかけてゆく日を浴びてきらきらと輝く川の前で、人々の行き来する林と、深い森との境目で。

「……その聖者さまと別れたあとすぐのことでした、わたしがほとんど厄介払いのようにして結婚させられ、いまの夫のところへ嫁いだのは」

アマリタはわたくしの前に、食後のお茶を差しだしながらそう云って、どこかつかしむような顔つきになった。

アマリタはいま四十半ばくらいであろうか、髪にはところどころ白いものが混じり、顔にもいくつかさななわがでできはじめている。活発な少女だったアマリタは、いまでは豊満な、どっしりした、子を産んだ女特有の体つきをしている。口もとには優しいだが、目はどこかいたずらっぽく、人からかうようだ。ひよつとすると、いまでもまだいじめっ子をふん捕まえて、縛り上げるくらいのことはしそうである。

「どうやら父の親族が、持参金がなくても嫁にもらってくれるような人を探したようです……そして夫の両親に行き着いたというわけです。夫の両親はどうにかして息子をまともにしたがっていました。結婚して子どもでもできれば少しは変わってくれるのではないかと考えて、財産などにもなくてもいいからとにかく若い女が嫁に来てくれればと思っていたようです。そうしてわたしは、縁もゆかりもないこの町に嫁いで来たというわけです」

アマリタは話へのちよつとした当てつけをこめて肩をすくめた。

「でも最初の何年かは、わたしはまだあんまり子どもでもでしたし、夫も自分に妻がいるということがよく飲みこめないでいるようでした。何年か経ってから、彼はある日突然、自分の家にひとりの女がいることに気がついたようなのです。そしてそれが妻という名の、自分に与えられたものであるということも。

とはいえ、彼の両親が期待していたように、それが彼を感動させるなどということは決してなかったのです。あの人はどういうわけだか、世の中のすべてを憎んでいました。まともな状態ではその憎しみに耐えられないのだとでもいうように、絶えず酔っ払っていて、しらふでいるときはほとんどありませんでした。わたしのことを、自分の憎しみや怒りをぶつけるはけ口くらいにしか思わなかったでしょう、しょっちゅうわたしに文句をつけては怒鳴り、わたしが抵抗すると黙らせようとして殴りかかってきました。わたしたちは夫婦なら交わして当然のまともな会話などしたことがありませんでしたし、わたしはあの人が大嫌いで、あの人もわたしを嫌っていました。そうです、そのころにはまだ、わたしは夫に逆らう元気があったのです」

アマリタはおどけたように笑ったが、それは少し痛々しい笑みに見えた。

「そのころのわたしは毎日ひどくみじめで、腹立たしく、情けない気持ちでした。わたしをこんな男のところへ嫁がせた親戚や、ろくに反対もしなかった父や母のことをずいぶん恨みました。夫のことも憎みました。いま思えば、あんなに懸命に恨んで思いつめていたのがなんだかおかしいようですけれど、当時はそうした思いで頭がいっぱいだったので、おそらく、そうやって思いつめることでなんとか自分を保っていたのでしょう。わたしはまだ若か

ったし、子どものころから人並み以上の負けん気や意地がありました。それが強い感情となって、わたしを支えてくれていたのでしょう。でもある日、子どもができて……」

わたしの鋭い視線を感じたのだろう、アムリタはなだめるように微笑んだ。

「わかってはいます、憎んでいる夫とのあいだにどうして子どもなどできたのかとお思いなんでしょう？ でも、わたしになにができたというのでしょうか？ 夫を張り飛ばして拒絶し、自分の身を守るためにひそかに毒を飲ませるとかすればよかったですか？ あるいは逃げ出すとか？ でも逃げ出してどこへ行くのですか？ 実家は遠く、どうなっているのかもわかりませんでしたし、わたしは自分を追い出したみんなを憎んでいました。弟や妹のことは心配でしたが、わたしが帰ることでふたりにとってますます悪いことになるかもしれないのです。」

ええ、もちろん、夫を張り飛ばす勇気や力なら、わたしは確かに持っていました……わたしはひ弱な女ではありませんでしたから。でも相手は酔っ払いの男で、少しくらい殴られたところで痛くもかゆくもなく、かえって逆上して凶暴になるばかりなのです。わたしはずいぶん抵抗したつもりです、それもかなり長いこと。並みの女ならとくに諦めて云いなりになってしまうような状況でも、わたしは屈しませんでした。でもそれは要するに、ずっと緊張し

っぱなしで、四六時中神経を張りつめていることです。そんなことは、やはり何年も続けるわけにいかなかったのです。

自分が妊娠しているとわかったとき、わたしは愕然として、しばらくにも考えられませんでした。

両足から力が抜けてしまい、同時にわたしの中でなにかがぼつきりと音を立てて折れてしまったみたいでした。わたしの意地や、負けん気や、これまで自分を奮い立たせていた恨みや憎しみが、急に力を失ってしまったみたいでした。それはなにか……そうですね、あえて云うなら、それはなにか絶望的なことでした。あの夫の子どもがこの体の中にいるのかと思うと、わたしたちのあいだになにか目に見えない鎖のようなものが渡され、しっかりとつながれてしまったようで、わたしは目の前が真っ暗になったような気がしました。

はじめての妊娠だったからでしょうか、つわりにひどく苦しみ、それがまた長く続くので、わたしはすっかりまいってしまいました。ようやく子どもが生まれたときも、かわいいとか、愛おしいかと思う気持ちはほとんど生まれませんでした。いえ、正確には、そうした気持ちもないではなかったのですが、これはあの男の子どもだと思つくと、とたんにあの男がわたしにした仕打ちを思い出し、そういう気持ちを追いかけてしまうのです。ふたつの気持ちのあいだで、わたしはずいぶん苦しみました。でも世話を

してくれる人は誰もいないし、だまって見殺しにすることもできず、お乳をあげたりあやしったりしているうちに、少しずつ愛情のようなものが芽生えもしました。

一方で、夫のことはますます嫌いになりました。みつともなく酔っ払っているばかりで、働くということをしらないものですから家には少しもお金がなく、明日の生活さえも毎日心もとないのです。夫の両親はわたしを気の毒に思っていたのでしょう、老骨に鞭打って仕事を続け、わたしもできることを手伝ったりして、なんとか食べていこうとしましたが、大して役には立ちませんでした。少しお金ができると、夫がみんな飲んでしまいましたから。あの人のやることといったら、酔っ払うか、わたしにちよっかいを出してわたしが抵抗するのを見て楽しむか、それにも飽きると家を出て行ってしまふかでした。子どもへの愛情などというものも期待するだけ無駄でした。自分が家にいるときに子どもが泣いたりすると、あの人はかっとなって、わたしから子どもを取りあげて窓から投げ捨てんばかりになるのです。

このころになると、わたしが抵抗すればするほど悪いということがようやくわかってきました。わたしがにらみつけたり、声を上げたり、手を出したりして抵抗すると、あの人はますます興奮してひどいことになるのです。わたしはもうそうしたことに疲れきってしまいました。そしてついに、夫に抵抗するの

をまったくやめてしまったのです。

何年かのあいだに、子どもがさらに三人もでき、状況はひどくなる一方でした。どうやって毎日生活していたのか、よくおぼえていません。夫の両親の援助や、近所の人が見るに見かねてものをわけてくれたりして、どうにかやっていたように思います。わたしはもうなにをする気力もありませんでした。夫に抵抗するのをやめてからというもの、わたしの中であってわたしを支えていた強い部分は、残らずすっかり失われてしまったようでした。わたしは自分がアムリタという名の、ひとりの女であるとはもう思っていないませんでした。そんな意識はすっかり消え去ってしまい、なにも考えず、なにも感じず、ただ子どもの泣き声や言葉にほとんど本能の部分で反応して、なにか食べさせたりあやしたりするだけでした。夫に対してももう憎しみはありませんでした。そんな強い感情を抱くような気力もなくなっていたのです。すべてがどうでもいいことのように見え、自分から離れた遠くの世界で起きていることのように思えました。わたしは実際、自分がどこにいるのかもよくわからないようになっていたと思います……」

話があまりにも悲痛なものになってきていると思っただろうか、アムリタはわたくしを気づかうように微笑んだ。だがそのときのわたくしは、ぜひ話

の続きを最後まで聞かねばならないという気持ちになつていたから、先を促した。アムリタはお茶をひと口すすって、先を続けた。

「ある日、近所に住む女性がやってきて、わたしをちょっとした外出に誘いました。その人は名をダーパナといい、切れ長の聡明そうな目をした、きれいな人でした。わたしより少し年上でしたが、ダーパナの夫も商人で、四人の子どもがいて、わたしたちの境遇はある意味でよく似ていました。そのせいでしようか、彼女はなにかとわたしを気にかけてくれ、食べ物や子どもの服をわけてくれたり、わたしの子どもたちを外へ連れ出して、自分の子どもと一緒に遊ばせてくれたりしました。

ダーパナは明るく、屈託のない女性で、いつもにこにこ微笑み、誰にでも親切でした。わたしは彼女のことを、なんて幸福で無邪気な人なのだろうと思つて、うらやましく思っていました。彼女には酒好きの夫をもつようなみな明るく澁刺としていて、うででした。子どもたちもみな明るく澁刺としていて、ときどき遊びに来ては明るくはしゃいだ声を響かせてくれました。そんなときは、暗くてどんよりした家の中も少しは明るくなるようでした。

ダーパナは、寝台に横座りになつてぼんやりしていたわたしの頬を励ますように叩き、今日は外が涼しくて快適だから、子どもたちを連れて川へ水浴び

に行こうと云いました。わたしは乗り気ではありませんでしたが、ダーパナはわたしを半ば無理に引きずって、子どもたちを連れて出発しました。

その町の東側を、一本の太い川が大きく蛇行しながら流れていました。町はその川に半ばとり囲まれたようになっていて、川の上を行き来する舟がさまざまなものを運んできては、また別のものを積みこんで運んで行くのでした。雨期にはその川は茶色い泥色に濁り、水かさが増して荒れ狂ったように流れるのですが、乾期になれば一転して穏やかな、美しい流れになります。わたしたちはその川へ向かってのんびり歩いてゆきました。

わたしの子どもたちは久々の外出にはしゃいでいました。ダーパナの子どもたちには会えたのがうれしく、外の空気を吸って体を動かすのがうれしくてたまらないようでした。ダーパナとわたしとは子どもたちから少し離れたところを歩きながら、言葉少なに会話を交わしていました。ダーパナはおしゃべりというわけではありませんでしたし、そもそも、なにを訊かれても云われてもわたしが生返事しかなかったのですから、会話の弾みようがなかったのですけれど。わたしはこんなに親切で気立てのよいダーパナが、こんなわたしを外に連れ出し、一緒に散歩したりなどして楽しいのだろうかというようなことを、なにかとげとげしい気持ちで考えていたような気がします。

ほどなく、わたしたちは川に着きました。川辺に

は多くの人たちが涼をとるためにやってきていました。子どもたちはきらきらしたしぶきを散らして川

に飛びこみ、ずぶ濡れになりながら笑い声を上げ、若い男女は並んで腰を下ろして、そこに自分たちの

甘い未来でも映っているかのようにうっとり川を見つめていました。子どもを従え、大きなお腹をし

た母親が川の水で子どもを洗っていました。互いに腕をとりあい、よろよろとやってくる年老いた夫婦

の姿もありましたし、悲しみに沈んでいる寡婦らしい女、なにか思いつめた顔をして、じっと川をにら

みつめている男もいました。わたしたちはそうした人たちの中に加わり、子どもたちを川で遊ばせ、ダ

ーパナとわたしとは川岸に腰を下ろして、しばらくあたりを眺めていました。

『……実はわたし、あなたに云わなければならないことがあるの』

しばらくして、ダーパナは突然こう切り出しました。

『わたし今度、遠くへ行くことになったの……どこかはまだわたしにもわからないけど……』

ダーパナはちよつと寂しそうに微笑みました。わたしは驚いて、思わず彼女の顔を見つめました。

『まあ、そんな話、ちつとも知らなかった』
わたしは云いました。

『遠くって、そんなに遠くなの？ 今度っていつな

の？』

『わからない……あんまり先の話ではなさそうだけれど』

ダーパナは考えこむような顔で云いましたが、わたしを心配させまいとしてか、また微笑みました。

ダーパナのいつにない調子が、わたしをなんだか不安にさせました。

『そんな……なんだかあんまり突然じゃないの。なにがあったの？』

『夫の都合なんだけれど。急に引越ししなくちゃならないんですって』

ダーパナはわたしから視線をそらし、川の中ではしゃいでいる子どもたちのほうを見ました。

『わたしはもともとこの生まれじゃないからそれほど気にならないけど、夫はこの町で生まれ育った

から、ほんとは出ていくのがいやみたい……でも仕方がないんでしょうね、そう決まってしまうたらしいから』

彼女はなんだか他人事のように話をしました。ダーパナの夫は、町で小さな店を営んでいる人です。

わたしも何度か行ったことがあります、あまり目立たない、なんととはなしに薄暗い店で、夫もなんだか愛想がなく暗い顔の男で、そうたびたび行く気にはなれませんでした。ダーパナが明るい女性なので、

こんな男が夫なのかと思っただけです。

『この話、まだ誰にもしていないの。でもあなたに

だけは云っておきたかったから。わたしたち、なんとなく境遇が似ているし、家も近いでしょう。わたし、あなたがひどく苦労しているのを知っていた。

それが自分のことのようにつらくて、いつもなにかしてあげたいと思っていた。わたしのほうにもあまり余裕がなくて、ほとんどなにもできなかったけど、

でも、ねえ、アムリタ、くじけてはだめよ。負けてはだめ。自分を見失っちゃいけない、どんなにつらくても』

ダーパナは真剣な顔でわたしを見つめました。彼女がわたしを励まそうとしてくれていることはわかったし、それはありがたいことには違いなかったのですが、そのときのわたしには、その言葉がひどく

通り一遍のもの、そしてわたしをいらだたせるものにしか感じられませんでした。突然、くじけてはだめ、なんて、あなたにながわかるの？ とわたしは思ったのです。

『でもねえ、ダーパナ』

わたしはむらむらと湧いてくる怒りのような、悲しみのような気持ちを抑えて云いました。

『わたしはもうずいぶんたくさん抵抗したの。それこそ全力で頑張った。でも、それだと余計にいけないだつてことがわかっただけだった。わたしは怒ったし、恨んだし、憎んだ。でもそうすると、余計

相手をつけあがらせるだけで、相手をますます悪くするだけなの。あなたにはわからないかもしれない

けど、そういうことに、わたしもう疲れちゃったの』
 ダーパナは悲痛な、泣き出しそうな顔でわたしを見つめました。

『わかるわ……信じられないかもしれないけど、わたし、よくわかるの、あなたの云ってること。わたしも悩んだし苦しんだ……でもあるとき、こんなことじゃだめだって気がついて……』

そのとき、町のほうから誰かがダーパナの名を呼びながら走ってきました。ダーパナの家で使われている小間使いの女が、ご主人が呼んでいると、ダーパナを呼び戻しに来たのでした。

『わたしはあなたが思ってるような人間じゃないの。それよりもずっと、ずっとあなたに近いのよ。わたしがあなたをどれだけ近くに感じてきたか、わかってもらえたら！』

ダーパナはそう云って、なんとなく話し足りないような、立ち去りにくそうなそぶりをしていたのですが、小間使いが急かすので、自分の子どもたちを引き連れて行ってしまいました。

わたしはひとり川辺に残されました。わたしの子どもたちはまだ川で遊んでいました。ダーパナの子どもたちの明るさが乗り移ったとでもいうのでしょうか、家では半ばおびえたような、不安げな顔をしておとなしい子どもたちが、互いに水をかけあったりわざと転ばせあったりして、声を上げて笑っているのです。いつも気難しくぐずってばかりの一番下

の息子も、きょうだいたちに混じって楽しそうにしています。わたしはなんだか涙が出てきました……この子どもたちは、このままずっとこうしてこの子どもたちだけでやっていたほうが幸せなんじゃないかしら。愛情のない無気力な母親と、それに輪をかけて愛情がなく無責任な父親とのあいだに暮らしていたって、いいことなんかひとつもない……そんな考えがふと浮かびました。

わたしはこのとき、なにかを思いついたとか、意識したわけではなかったと思います。ただ、自分でもよくわからないうちに、よろよろと立ち上がっていました。そうするあいだも、子どもたちのことをじっと見ていました。子どもたちは相変わらず楽しそうに笑い、バシャバシャと水をかけあってはしゃいでいます。

わたしは子どもたちを見ながら、川下に向かって歩きはじめていました。川には多くの人がいて、誰もわたしになど注意を払っていませんでした。わたしはだいたい長いこと、子どもたちを目でとらえながら歩いていたらと思います、そのうち前を向いて、子どもたちを見るのをやめてしまいました。そうして我知らず早足になり、どんどん人気の多い場所から遠ざかってゆき、町から離れて行きました。

わたしはただ歩きました。前に進むことしか頭になく、ほかのことはなにも考えませんでした。どこへ行くかなど考えてもいなかったし、残してきた子

どもたちのことさえも、もう頭に浮かびませんでした。ただ前へ進まなくてはならないという焦りに似たものだけがあり、足が自然とやかに導かれるように前へ進むのです。まるで、なにをすべきなのかわたしの体は知っているけれども、心のほうは少しも知らないみたいでした。

どれくらい歩いたかわかりません。ふと気がつくと、わたしは川沿いにずっと歩いてきていて、町からだいぶ離れた林の中に入りました。それはちょうど、わたしの故郷の林がそうであるように、その中を川がゆるやかに流れ、その先はそのまま奥深い森へ続いているような、そんな林でした。

わたしのいま立っている林は、そして目の前を流れる川は、もちろん子どもたちのころに見ていたあの林や川ではありませんでした。でもそれは、まったく同じものでもあったのです。だって川や林というのは、結局はみな同じものではないでしょうか。結局のところ、ひとつのものを意味し、ひとつのものではないでしょうか。そうしてみると、目の前の川は、まったく故郷のあの川なのです。それは故郷の川と同じように、水面にきらきらとたくさんの光の粒を踊らせていました。ああ、なつかしい光の踊り！ わたしはそれを見て思わず微笑んでいます。わたしはこの踊りを知っています。このきらめきが投げかけるたとえようもない親しさを知っています。それは相変わらず孤独なわたしの友だちでし

た。相変わらずわたしをなぐさめるようにきらきらと光り、わたしを誘うように揺れていました……アムリタ、アムリタ、アムリタ、とその光は呼んでいました。もう長いこと、こんなふうに親しげにわたしの名を呼んでくれる人はありませんでした。アムリタ、アムリタ、アムリタ……

そしてわたしは、今度こそその光の中へ飛びこんだのです。わたしにはこの光だけが友のような気がし、その背後に残す世界には、わたしの居場所はなく、わたしの心もないように思いましたから」

ここでアムリタは口を閉じて、少し間を整えるために黙りこんだ。彼女の顔は穏やかだった。しかし一方で、それは確かに一度死をくぐってきた者の顔でもあった。それは、この世に対して死んでいるに等しいわたくしたち修行者もまた身につけねばならぬところの、あのほの暗い静寂を確かに宿していた。

わたくしは言葉もなくアムリタを見つめていた。聡いアムリタは、わたくしのまなざしの意味を感じとったようだった。彼女は伏せていた目を上げてわたくしを見つめた。わたくしたちのあいだに、そのとき確かにある種の諒解が、ある種の経験を経てきた人間だけが理解できる、言葉にできぬある諒解が生じ、わたくしは彼女に深い敬意を抱きはじめているのを感じた。

「考えてみれば、子どものころのあの日、あの聖者

さまに教えていただいたことを、このときのわたしはなにひとつ理解していなかったことになりました。実際、そんなことはすっかり忘れていて、そうしたことを思い出したのは、もつとずつとあとになってからでした」

アムリタはちよつと皮肉を交えた笑みを浮かべて、わたくしの茶碗にお茶を注ぎ足し、また話を続けた。

「次気がついたときには、わたしは自宅の寝台に寝かされていました。何日も、何年も眠りについてきたような気がしましたが、気を失っていたのはほんの一日かそこらのことに過ぎなかったようです。枕元には義母がいました。わたしと目が合うと、義母は泣き出しました。はじめはしくしくと、そして

しだいに昂ぶってきて、わつと声を上げて泣きました。彼女はわたしの両手を握りしめ、彼女の頬に、胸にあてがいがい、泣き続けました。そこには長年の心労に疲れ果て、老いばれやつれてしまったひとりの女がいました。白髪だらけのつやのない髪、刃物で無理やり刻みこまれたかのような、深くえぐれたようななしわ、歯は何本も抜け落ち、目は落ちくぼみ、腕はやせ細ってしみと細かいしわだらけです。

わたしはまじまじとそれらを見ていました。若い母と妻という違いこそあれ、同じひとりの男のため

責や後悔や愛憎半ばする気持ちに耐えてきたに違いないのです。それはまぎれもなく、わたしの未来の姿でした。わたしも何十年かのうちに、このよ

うな老婆になるに違いありませんでした。それはみじめな、ぞつとするような姿でした。ところどころ歯の欠けた口を開けて泣きじゃくる彼女の姿には、なにか無性に人の嫌悪を呼ぶようなものが含まれていました。でも、そのときのわたしはなぜかそれをごく冷静に受けとめていたのです。彼女が愛おしくさえありました。彼女のすべてが理解できるような気がしました。そしてすべてが、まったく彼女のせいではないことも、彼女には、どうにもしようがなかったのだということも。

しばらくして、義母は泣きやみました。そしてわたしに何度も詫言いました。自分に力のないことを嘆きました。都合のいいことばかり期待して、夫とわたしとの結婚を止めなかったことを後悔していると云いました。あんな息子に育ってしまつて悲しいと云いました。でも、彼女になにができたのでしょうか？ 彼女は確かに、あまり賢い女性には見えませんでした。流されがちで、人の云いなりになりやすい女だといふのはひと目でわかります。それは確かに彼女の弱点です。それがあんな息子を作つたのだと、責めようと思えば責められたでしょう。でも、そんなことは誰にも証明できないことですし、誰よりも彼女自身が一番そのことで自分を責めているように見

えました。きっと彼女は人生の、わたしよりもっとずっと早い段階で、抵抗をやめてしまったのでしよう。わたしには、それがわかるような気がしました。

義母が落ちついたころ、義父に連れられて、寝室にひとりの男が入ってきました。五十くらいでしょうか、白髪交じりのひげを蓄えた、日に焼けた小柄な男で、わたしを発見して助け上げた船乗りだということでした。その人は入り口のところに立って、小さいけれどもしぶとそうな体つきに似合わない、どこか遠慮がちな目でわたしをしばらく見ていましたが、義父が義母を連れて部屋を出て行くと、わたしの寝ている寝台のところまでやってきました。

『おれはあんたに怒られる覚悟で来たんだ、泣かれる覚悟で来た……』

その人はそう云って顔を伏せました。

『あんた、あの酒びたりの妻だつてな……おれは川の中をぶかぶか浮き沈みしているあんたを見たとき、考える間もなく船を寄せて、なんとかあんたを引き上げた。引き上げたあんたの顔を見たとき、事故に遭ったんじゃないとすぐにピンときた。ばかな女だと思つたよ。なんだつて自分から死に行くようなことするんだ、つて。でもあんた、あの酒びたりの妻だつてな……それを聞いておれは、悪いことしちゃったんじゃないか、あのままほつといてやりやよかつたんじゃないかと、後悔した。あいつの酒乱つ

ぷりを知らんやつはいないからな。あんな男が夫じゃあ、死んだほうがましだつてこともあるかもしれない……』

その人はそう云って、わたしをちらりと気遣わしげに見て、また顔を伏せました。

『……正直に云って、あなたにお礼を云うべきか、怒るべきか、わたしまだわかりません』

しばらくして、わたしは云いました。

『でも、とにかくわたしは生きています……きっと死なない運命だったのでしょ。あとのことはわたしの問題です。あなたは気にしないで』

その人は驚いたように顔を上げ、わたしをじっと見つめて、短いため息のようなものをつきました。

『おれの見聞きしてきたとこじゃあ、あんたのような女は、確かに死なないよ』

部屋を出て行く直前、その人はそう云って、ちょっと微笑んだように見えました。わたしにはその人の優しさも、気づかいても、その人の云っている意味も、なんだかみんな理解できるような気がしました。それは不思議な感じでした」

このとき、アムリタの家に子どもたちが連れだつてやってきて、アムリタに川で一緒に遊ぶように要求した。アムリタは笑って、あんたたちと遊ぶにはわたしは年寄りすぎるのよと云ったが、どうやら子どもたちの目的は、アムリタの作った草の舟を川へ

流して競争させることにあるらしかつた。それでアムリタは子どもたちのために、彼らが摘んできた草を使って小さな草の舟をこしらえだした。

「一度死にかけたことで、わたしのなにかが変わってしまったのでしょうか？ わかりません。わたしは相変わらずどこかぼんやりしていて、自分がここにいるような、いないような感じを味わっていました。その一方で、頭の一部は妙にさえて、目覚めていました。わたしは回復するまでひと月くらい寝台に横になっていたでしょうか、そのあいだ、わたしを心配してくれていた人たちがほとんど毎日のようにやってきて、わたしを見舞ってくれました。その誰もが、わたしを気づかい、励ますような言葉をかけてくれました。わたしを助けてくれたあの船乗りの男の人も、ときどきやってきては、しだいに回復してゆくわたしを満足そうに見て、わたしのような女が死ぬわけではないと、例の言葉を呪文のように、帰る前に残してゆくのです。わたしはそうしたものを受けながら、部屋を訪れる人たちの気持ちが、手にとるようにわかる気がしました。そして彼らが歩んできた人生のことも。

何日か経つたころ、ひとりの女の人が訪ねてきました。わたしと似たような年ごろの人で、宝石のついた腕輪や首飾りをたくさん身につけ、鮮やかに染め上げられ刺繍が施された、とても質のよい布や腰

帯をまどっていました。物腰は堂々とした、自分に満足している人のもので、どこか裕福な家の奥さまであることはひと目でわかりました。

その人はサティヤと名乗り、寝台の横に置かれた椅子に腰を下ろして、しばらくのあいだわたしをちらちらと見つめ、話を切り出しにくそうにもじもじしていましたが、やがて決心がついたのか、ちよつとならずいてこう話しはじめました。

『あなたはダーパナがどうなったかご存じ?』

わたしは正直に云って、そのときまでダーパナのことをほとんど忘れていました。そう訊かれてはじめて、そういえば町を出るようなことを云っていたことや、最後に会ったときの様子がおかしかったことなどを思い出したのです。わたしが少し驚きながら首を振ると、サティヤはもつともだというようにならずいて、

『そうでしょうね……あなたが川に飛びこんだあの日、おそらくあなたと別れたすぐあとに、ダーパナは町を出て行きました。夫や子どもたちと一緒に……その理由はご存じ?』

わたしはまた首を振りました。この人はどうしてダーパナのことばかり話すのだろうか? 彼女の親戚か友だちかしらとわたしは思いました。

『ではダーパナは話さなかったのね……』
サティヤは意外だというようにわたしを見つめました。自分だけがすべてを知ったうえで話している、

もったいぶったサティヤの態度にわたしは少しじれてきたので、こう聞き返しました。

『ねえ、サティヤさん、あなたはさつきからダーパナの話ばかりするけれど、いったいどういう理由でわざわざここへいらしたのですか? ダーパナがどうしたというの? あなたは彼女のお友だちかなにか?』

サティヤはわたしのじれているのに気がついたのでしよう、ごめんなさい、と小さく謝って、なかぎこちなく不器用そうにはありましたが、少しうち解けるように微笑みました。

『わたしはダーパナがあなたのことをずっと気にかけていたことを知っています。たぶんあなたが思っている以上に……そしてわたしはその理由を知っているんです。わたしとダーパナの関係はこうです。わたしはほんとうなら、ダーパナの夫と結婚するはずだった女です』

わたしは驚きましたが、その意味があまりよく飲みこめませんでした。それで、どういうことですかと訊きました。

『こういうことなの……なにかからお話ししたらいいか……わたしの両親とダーパナの夫の両親とは顔なじみで、わたしたちが結婚することは、わたしが生まれる前から父親どうしのあいだで決められていました。ダーパナの夫……名前はマニッシュといますが、彼はわたしより十も年上で、子どものころは

一人前の頼もしい男に見えたものです。彼も未来の花嫁だと思って、わたしにできるだけ気を遣ってくれていたように思います。でも、大きくなるにつれて、わたしは彼のこと次第に好きではなくなっていきました。彼はなんというか……彼を知らない人にわかってもらうのは少し難しいのだけど、あの人はとても冷たい人で、他人に決して心を開かず、心づかいとか気づかいとかいうことが理解できない人なのです』

サティヤの目に一瞬間、昔の憤りのような、傷つけられた恨みのようなものが燃え上がりました。

『いえ、理解できないというのは云いすぎね。そのふりはできる……でもそれは決して本心ではないし、あの人の心には、優しさや思いやりということだけではなくて、他人に対するほんとうの関心というものもまったくないの。あの人は、なにかが自分のものになるまでは、けつこう手を尽くして心を砕きます……あくまで彼なりのやり方でだけれど。でも、一度自分のものになってしまえば、もうひどく無関心になり、ぞんざいになり、どう扱ってもいいと思うようになるのね。わたしは彼との結婚の直前、そのことをはっきりと理解しました……彼がとても冷たい、ひどい男であるということ。』

そのときわたしは、この男からなんとしても逃げ出さなくちゃいけないと思いました。こんな男と結婚したら、自分がどうなるかは目に見えていたもの。

毎日召使いのように扱われて、優しい言葉など少しもかけてもらえず、なにかあるたびに皮肉を云われてちくちくやられるのです……彼はひどい皮肉屋でした！皮肉を云うのが趣味みたいなものだったわ。わたしがきれいに装って彼の前に現れると、きみは今日はまるで遊女か女王のようだね、どっちも同じようなものだけど、とか云うのだし、わたしがなにか粗相をすると、へーえ、きみもそういうことをするんだな、まあ、誰しも失敗はあるからね、と、人を怒らせ、傷つけずにいない調子で云うのです。そういうとき、彼の目はとても冷たくて、わたしを責め、見下しているように見えました。わたしがどんなに愛想よくふるまっても、優しくしたとしても、少しも変わりはないのです。彼は冷たく、人を嫌っていて、固く心を閉ざして人のよいところなど少しも認めようとはしませんでした。

こういうことは、実際にやられてみなければわかりません……彼がひどい男だと人に理解させるのは難しいのです。町の人は彼のことを、せいぜいちょっと暗くて、なんとなく親しみにくい男くらいに思っていたでしょう。でもわたしは、彼と暮らす女がどういふ目に遭うか、よく知っていました。わたしは手を尽くして、うまく彼から逃げ出しました……彼より数段性格がよく、能力もありそうな男を見つけて、結婚してしまつたのです。我ながらうまくやつたと思います。どうやってあんなことができた

のか……たぶん必死だったのでしょ。

マニッシュとの結婚はなかつたことになり、わたしは身内から相当冷たい仕打ちを受けましたが、幸いわたしの夫は懸命に働き、成功しました。つらい時期がなかつたとは云わないけど、わたしたちは裕福になり、召使いや乳母を何人も置いて、なに不自由なく暮らしています。わたしの両親もいまでは夫に満足しています。父なんか、マニッシュのようなやつと結婚するよりよほどよかつたなどと調子のいいことを云っています……そうでしょうね、皮肉なことだけど、ついにそのことが証明されてしまつたみたい。実はマニッシュの一家は逃げたのです。彼の商売は、もう何年も前からだめになつていて、でも彼はそのことを誰にも云わなかつたようです。あちこちからお金を借りて工面して、なんとかとこり繕つていたようですが、限界が来たんでしょう。ダーパナも彼と一緒に رفتつたようです。もしかしたら、いまごろ逃げ出しているかもしれないけど……そうだといいのにとわたしは思うけど』

て、彼に毎日皮肉を云われ、冷たい目で見られて、神経をすり減らしていたのはわたしだったはずだもの。ああいう男は、傍目にはそんなにひどい男には見えないものです。どちらかというとおとなしい、悪いことをするような度胸もない男のように思われるんじゃないかしら。あなたの夫の場合には、町の誰もがひどい男だとわかつてます。たいていの人は、あんな男と結婚させられるなんてかわいそうだとあなたに同情するはずですよ。でもマニッシュの場合には！ダーパナがどんな目に遭っているかわかるのはわたしだけ。わたしは彼女をなんとか少しでも支えたいと思つて、せめて話し相手になつてあげられたらと、ずいぶん努力しました。でもダーパナは、マニッシュからうまく逃げおこせた苦労知らずの女を、自分の話し相手にふさわしいとは思わなかつたみたい』

サティヤは目を伏せ、一瞬自分をあざけるように囁きました。それは一見、ほとんど高慢な印象さえ与えるようなしぐさでしたけれど、わたしはなぜか胸が痛みました。

『さあ、これで、ダーパナがどうしてあなたに親しみをおぼえ、あなたの支えになろうと頑張つたか、おわかりになつたでしょ？あの人は不幸な人だった、とても不幸な人だった！でもそれを決して人に見せなかつた。わたしがマニッシュと結婚していったとしたら、とてもあんなふうにはなれなかつたで

しょう。あんなに強く、あんなに優しく、あんなに………わたしはただ、せめてあなたにはダーパナのことをわかってもらいたかったの。あの人がどんな男と暮らしてきたか、そしてそれなのに、どんなに親切で強かったか』

サティヤが帰ったあと、わたしは彼女の話を知り返しくり返し思い浮かべ、ダーパナの云ったことや、その生活や苦しみのことを思いました。彼女は本当に、不幸な人でした！ もっと早くにそうだとわかっていたら、わたしたちはきつとぜんぜん違った関係を作れたのではなかったでしょうか？ でも、ダーパナは進んで愚痴をこぼすような人ではありませんでしたし、わたしも人の打ち明け話を聞くには、あまりにも自分のことで精一杯でした。そんなことで彼女を失ってしまったのが、とりかえしのつかないことのように思えました。わたしはダーパナの境遇や、彼女がわたしに示してくれた優しさのことを思っ泣きました。ほんとうにわたしは、なんて自分の不幸にばかりとらわれていたのでしょうか。周りを見れば、それぞれ形こそ違えど似たような苦しみや不幸ばかりあることに、どうして気がつかなかったのでしょうか？

わたしはわたしを見舞ってくれた人たちの顔をひとりずつ思い浮かべ、その人たちの歩んできた人生を想像してみました。みんな、わたしと同じように傷だらけでした。わたしと同じように傷つき、わた

しと同じように苦しそうで、でもときどきおそろしく間が抜けた感じがしたりしました。子どものようであり、成熟した大人のようであり、なにもかもわかっているようで、なんにもわかってはいなかったりするのです。そうしたことが、人々のちよつとしたしぐさや言葉遣いなどの中に、はつきりと見てとれました。まるで子どもころのように……子どもころのわたしは、確かにこうしたことにとても敏感でした。そして相手の悲しみを感じたり、痛みを感じたりしたものです。そうです、わたしはまるで小さなアムリタがものを見るように、自分のまわりのものを見ていたのです。そう気がついたとき、わたしは自分が間違いないくあのアムリタであることが、少しづつわかってきたように思いました。

夫は長いあいだわたしのもとへは来ませんでした。おそらく、義父や義母が止めていたのでしょう。あの人はそれはそれを、一度力尽きたわたしへのせめてもの心づかいだと思っていたかもしれない。実際それはたいへんな努力だったでしょう……酔ったあの人を止めるのは容易なことではありませんから。でもある日とうとう、夫が寝室に入ってきました。夜でした。彼はいつものようにひどく酔っていました。そして寝台の上に横たわっているわたしをじろりと見て、いつまで仮病を使っているのかとか、おれの家で怠けやがってとか、さんざんに云いはじめました。わたしは夫をじっと見ていました。長いあ

いだ憎み続けた、大嫌いな男の顔をです。こうして悪態をつくときの夫は、とりわけ醜いのです。顔をゆがめ、怒りと憎しみをむき出しにして、彼はあらゆるものをののしるのです。わたしはその顔が大嫌いでした。見るだけでぞつとするようでした。夫ののしり声が聞こえるだけで、腹の底が凍るような感じがしたものです。

でも、そのときのわたしは冷静なままでした。この人はなにをこんなに憤っているのだろう、とわたしは思いました。こんなにわめき散らして。この人はどうしてこんなに怒っているのだろう。疲れないのかしら、いつも酔っ払ったままで。

彼はさかんにわたしをなじり、文句を云つていましたが、それが自分に向けられたものだと、わたしにはもう感じられませんでした。

わたしがそんな醒めた調子だったからでしょう。夫は腹を立てたらしく、わたしを寝台から引きずり下ろそうと、つかみかかってきました。わたしの体はとっさに身を固くし、身を守る体勢に入っていました。わたしはそのことを感じました。でも、それはわたし自身の恐怖だったのでしょうか？ たぶん、そうではありません……わたしの抵抗でもありませんでした。そうではなくて、わたし自身はただ夫を見つめていました……わたしの胸ぐらをつかんで持ち上げた夫の目をじっと見ていました。そして夫の目の中に、わたしの恐怖や怒りを見たような気がし

ました。それはいまでは夫の目の中にあり、わたし
のものではないようだったのです。

夫はわたしを殴るかと思いましたが、なぜかその
ままいましましげに寝台にわたしを突き飛ばし、く
るりと背を向けて部屋を出て行きました。そして部
屋の外で大声を上げはじめました。あーっ、あーっ、
という夫の腹の底からの叫び声があたりに響きわた
りました。夫はしばらくそのまま気が狂ったように
わめいていました。もはやなにに対して罵声を浴び
せているのか、本人にもわからなかったでしょう。
それはひどくあわれさを催すものでした。あれは
あわれな男です。夫はまったくあわれな男でした。
わたしはそのあわれさをどうにかしてあげたいとか、
かわいそうなものだとは思いませんでしたし、いま
でも思っていないません。そんなことを思ってもどう
にもなりません。でも、あの人は曲がりなりにもわ
たしの夫であり、わたしにはあの人と縁ができてし
まっているのです。子どもの父親でもあります。あ
の人があんな人だということとそういう事実とのあ
いだには、つながりがあるといえはあるようですが、
まったく別のことだといえればそれまでのことの方
でもあるのです」

五艘の小さな、しかし凜として胸を張るように草
の帆を張った舟ができた。アムリタは戸口に
向かって声をかけ、そこで待っていた子どもたちに

めいめい舟をもたせ、家の中にあるくだものも持た
せてやった。子どもたちは口々に、どこか生意気に
お礼を叫んで、光のあふれる戸口から、元気に駆け
だしていった。

「とにかく、わたしはこの夜、そんなふう思った
のでした。そしてすべてですが、結局は
それがすべてを変えたようなのです。なにが変わっ
たのかわたしにはわかりません。なにかが特別に変
わり、わたしがよい人間になったとか、少し賢くな
ったなどということはなにもないのです。わたしは
わたしでした……わたしはアムリタでした。駆けつ
こをすればいつも勝ち、木登りは誰よりも早く、自
分が女の子だとか相手が男の子だとかいうことには
少しも頓着しないで、不正には腹を立ててとことん
やっつけようとすると、あのアムリタでした。わたし
はアムリタです。あの日、あの聖者さまがほめてく
ださった美しい名前のアムリタです。わたしが知っ
ていることといえばそのことだけであり、あの聖者
さまがあれほど言葉を傾けていろいろ教えてくださ
った中から、わたしが理解できたことといえればただ
そのことだけです。でも、わたしは聖者ではないの
ですし、学者でもないのです。それでいいのではない
いでしょか？」

アムリタはそう云って微笑んだ……控えめで目立
たない、それでいてなにか力強い確信に満ちたよう

な、少女のような成熟した女性のような、不思議な
笑みであった。わたくしはひどく未熟な、完成から
はほど遠い修行者ではあるが、それでも、否おそら
くそのゆえに、その笑みがどこから来るのか、どん
な深みからやってくるのか、わかるように思った。

間もなくわたくしはアムリタと別れ、その町をあ
とにした。わたくしが旅の最中に偶然聞いたことと
いうのは、以上のようなことである。

後記に代えて

安倍晋三の死については、昼のニュースで速報を
見た瞬間になぜか、これはきつといやになるほど個
人的な事件だろうと思ったのだが、その予感はある
ってしまったようである。

だがわたしもまた社会性絶無の人間であり、おそ
らくひとりの山上徹也なのである。なんだかそんな
ふうに思ったりしている。

二〇二二年八月五日

水澤絳雪

<https://mjibms.com/>